

黎明期における関西の舞踊

神澤和夫

ここではいわゆる西洋舞踊について述べる。

大正デモクラシーを受けて自由闊達の気風が横溢しており、関東に起きた大震災の災禍からも免れて、商都大阪の経済的力価は十分残されていた。この時期、松竹、東宝の資本は本拠を大阪においており、いわゆる興行の新風は関西に独自の文化を形成していた。

モダンダンスについては、もっとも初期であり、東京に勃興した舞踊運動の華やかさは見られない。やがて戦争の時代に入って、萌芽でしかなかったモダンダンスは地下にもぐる。大阪の新劇が、築地小劇場の影響を受けながら、地域の生活を基礎とした関西新劇を育成したのと比較すると、社会的主題性に遠い舞踊の立場は弱かった。

もちろん東京から来た、あるいは帰って来た舞踊家が、昭和初期の大阪と東京の文化的距離の隔絶のために、いわば帰化芸術家となって、大阪風舞踊を育てた点は評価しなければならない。

昭和6・7年の交に檜健次が大阪の濱寺に研究所を設立する。濱寺は谷崎潤一郎、小出檐重の芦屋について大阪湾の南、泉州空港に近い高級住宅地で、与謝野鉄幹が歌会を開いて晶子、山中登美子と出会うのもここである。檜はアメリカツアーを挟んで11・2年ごろ東京にも研究所を設け、以後戦争勃発に押されて大阪を撤退するまで、活躍を続けている。

檜に続いて大阪に石井漢が支所を設け法村康之が派遣される。法村は友井唯起子と結婚して独立する。江口隆哉の系統は江口乙矢。エリアナ・パブロバ系統では与世山彦士・嶋晴美がいる。

江口乙矢の青年期の作品は荒削りながら毎回改善されて、芸術家が自作に手を加えると悪くするケースが多いのを考えれば評価さるべきであった。「ノックダウン」までは時代を前に進めるエネルギーが感じられて指導性を保っていた。

戦後、伊藤道郎、貝谷八百子、谷桃子らがあいついで関西に支部を設ける。

その中で出色の舞踊家は法村門下の森田真弘・益代である。アメリカのモダンダンスが東京の舞踊家たちの先生になる以前の、いわば進駐軍としてのアメリカの、われわれから見れば風俗としての新鮮さを森田は表現できた。「曼珠沙華」や「耳なし芳一」などが代表作である。法村、江口、森田ともに東北・北海道出で、夫人が関西である。

昭和30年代には法村はバレエに転向したので、

江口と森田がモダンダンスの水準を維持した。

平成時代は森田没し、子息が東京で活躍しており、法村、江口共に子息が舞踊団の社稷をついでいる。

モダンダンスとは言い難いがレビューの盛行は特記すべきであり、菅沼氏による宝塚歌劇団ばかりでなく、松竹資本がレビューに新天地を見いだすべくこれに競合した。

昭和2年ごろ川上貞奴を団長とする川上児童楽劇団が宝塚初期のような児童劇をやっている。河合幸七の河合ダンスが道頓堀松竹座を拠点に活躍。出発は近辺の堀江、新町、南等の遊廓の芸妓が主体であった。

他に「難波踊り」、「芦辺踊り」等やがて大阪劇場の「春の踊り」に発展し戦後まで継続される大踊りが始まっている。京都の「都踊り」、「鴨川踊り」が並行して、京都、大阪の遊里中心の芸事の伝統が続いた。ただし大阪では、伝統芸能よりかは、モダンな西洋舞踊の模倣が行われ、そこにも宝塚を含む関西の雰囲気がかがわられる。

昭和8年に歌舞伎座四月興行として打たれた「歌舞伎のをどり」には青山圭男、江川幸一が参加して構成は和洋折衷のレビューである。特別出演に佐藤美子、川畑文子、河原喜久恵らが西洋舞踊を踊り、タンゴを歌っている。場割りを転載しておく。第一景「歌舞伎の春」から「花の山」「桜花譜」「花見船」「リロンデル」「ハロウ春」「春の花束」「パストラアル」「歌に寄る」「ジャルダンヴェール」「緑の庭園」、「バレエブリアン」(華麗なバレエ)「桜吹雪」の12景に当時の雰囲気がかげよう。主体は松竹大阪楽劇部。

同じ月に松竹座では東京から楽劇部を呼び、河合ダンスと合同で新鮮味をだした。

このころにはすでにレビューのマンネリ化が警告され、女生徒でできることはしつくした、男性をいれるなどの発言が聞かれるようになっている。

すこし前、1925年(大正14年)10月アメリカからデニ・ショーン舞踊団が来日し、アジア諸地域を巡遊している。これは海外舞踊家の関西での足跡第一号である。

この時期、宝塚は瓦屋根の家々が立ち並び、閑静な郊外の感じで、商都大阪の煙突が風致をそこなっていると書いている。合衆国第一のニューヨーク首都劇場(キャピトル)より千人も多い5千人収容の大劇場で、大阪・神戸からの客で10日間満員だったという。

欧米のまともな舞踊団は初めてなのですぐに模倣者が現れて、同舞踊団がアジア諸地域を回って再来日したときには、タイツのかわりに股引で踊っていたと驚いてもいる。写真で見ると限り現在

に近い総タイト姿だが、当時の日本人にはショッキングだったことと推測される。

宝塚に榎茂都陸平があった。榎茂都流家元であった陸平は、家に伝わる型付を研究し、昭和6年にはドイツに渡って2年間ラバンとともにノーテーションの研究をした。この舞踊家は日本舞踊の家元であるけれども、ピアノも弾くし、バレエのテクニック、キャラクター・ダンスにも明るく、宝塚から松竹楽劇部に移った時にはオーケストラの編成から、舞台美術全般にわたって指導力を発揮した。再度宝塚に復帰して「新舞踊」の確立に努力した。群舞の構成に力をそそいだことも市川猿之助、初代藤蔭静枝の新舞踊とは趣が異なる。当て振りとはいわないまでも、身振りの洗練に終始する日本舞踊の伝統からは、かなり自由な動きの構成をしている点はもっと突き詰めて調査報告がなされなければならない。